



宮城大学 カリキュラムセンター 公開FD

学修者本位の学びの実現: 内部質保証基盤としての 教学マネジメントシステム

日時 2020年9月7日(月曜日) 14:00~16:00 ※開場13:30

会場 宮城大学 大和キャンパス 交流棟2階PLUS ULTRAー

※アクセス情報はこちら→<https://www.myu.ac.jp/access/>

【講演題目】

学修者本位の学びの実現: 内部質保証基盤としての教学マネジメントシステム —
インフォグラフィックスによる学修成果と教育成果の連動/発信/把握

【講演者】

半田 智久 氏 (お茶の水女子大学 教学IR・教育開発・学修支援センター 教授)

【講演概要】

予測困難さを増す現代、自律性高く生き抜く学生を育むため、大学には「学修者本位の教育」への転換が求められている。何からの転換なのかといえば、供給者目線からであり、それを学修者目線へと転換すべきだという*。

その「教学マネジメント」指針の提唱の必要性和大枠は至当といえよう。だが、その指針には一部の不徹底と矛盾が顕在している。そこに、この転換課題がまさに課題になりうるだけの重さが出ている。

このFD講演では、それが何か、を指摘しつつ、この課題の時宜性と重要性を明確にする。それと共に、何よりも「教学マネジメント・システム」をインフォグラフィックスによる文字どおり可視化された教えと学びの情報発信と把握を可能にした具体像として示し、教学情報の組み合わせによってみえてくるマネジメントの姿を紹介する。

この教学マネジメントの仕組みが、大学教育の内部質保証を担保する基盤システムとして機能する要は、学生による学修成果と大学による教育成果がシステムによって統合され、律動していくことにある。それは端的に言えば「貴学における学業成績と授業アンケートはつながっていますか?」というシンプルな問いに還元できる。従前、これらはただ単に「出している」「やっている」。大方それで済まされてきた。だから、成績の出し方だけをみて善し悪しが語られたり、授業評価は教員に戻して反応を得るなどに留まり、袋小路であった。それを当然としていたのが供給者目線の論理である。だが実際は授業を軸に両者は一如である。教学のアセスメントはその関係に浮き出してくる。

教学マネジメントを掲げ、学修者本位の教育への転換をこの国の大学教育政策として本気で進めるといふのなら、自己点検も認証評価も社会への説明責任も、普通の教育の営みと結果が不断に有機的な連携をとり、エビデンス・ベースのロジックのもとで説明と説得の力を発揮し、評価されねばならない。

この講演ではそれをどのように進めていくのか、その基盤が整備された宮城大学において、大学教育事業の構想を描きうることを示そう(半田智久)。

*中央教育審議会大学分科会:教学マネジメント特別委員会(平成~令和)

参加費 無料(学内外を問わず、どなたでも参加できます)

※参加をご希望の方は、2020年9月2日(水曜日)までに、ご参加される全員分の

①ご所属、②お名前、③ご連絡先メールアドレス

について、下記メールアドレス宛てにお知らせください。

★学外から参加の方は、Zoomによるオンラインの参加も可能です。

【参加申込・お問合せ先】 kyoumu1@myu.ac.jp